
緋弾のアリア ~ D家の最強の負完全

carzoo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緋弾のアリア〜D家の最強の負完全

【Nコード】

N6817Z

【作者名】

carzoo

【あらすじ】

特別な力を持つ少年は、D家では、欠陥品として扱われ、負完全となった。

最強である少年は、今日も、Dと言う文字を背負いながら世界を駆け巡る

P r o l o g u e c a r e s むじでまいるプロローグ（前書き）

よろしく願います。

Progresses
cares
やうでまういふ
プログラマー

空からさ、女子が降ってくると思うか？

俺、大崎嶺^{おおさきりょう}は、そんなのを思ってる奴は、漫画、もしくはラノベの読みすぎだと思っぜ？注意しろよ？

四月、それは出会いの季節、春であり、始まりを告げる季節でもある

俺は新学期の朝に居候の部屋で目を覚ました。まあ、俺の部屋は他の奴が全員いなくて俺一人しかいねえからこいつの部屋にいんだけどな。

そしてこの部屋の主、遠山キンジが寝ているほうを見る。

あいっかわらずフラグ建築士のクソ野郎だが、一応親友なのでほうっておこうとも思ったのだが、

ピン、ポーン

つと言つ慎ましいチャイムが鳴つて、その考えは、闇に消えた。
刹那、俺は、寝ているキンジに向けて“ある力”を使ってキンジに
空気を圧縮した弾を腹に食らわせる。

ごぼおお

つと言つ奇声を上げて、キンジが起きる。

「何しやがる！嶺！朝から滅茶苦茶な起こしかたしやがつて！」

「うるさいぞキンジ白雪あたりが来てるだろつからつとつといけ」
「ああ？分かった。行つて来る。」

そう言つて、キンジは寝具のままドアのほうに歩いていく。

キンジの「ゲツ」つと言つ声が聞こえた。ならば白雪なのだろう

「ふあ~~~~、今日もいっちょがんばるか！」

つで、白雪が部屋にあがつて来て、“キンジ”の為に作つてきて俺
にも“少し”分けてくれる白雪お手製の弁当を食べる。

キンジが横で、白雪が三つ指ついてお礼を言っているときに見えて
しまった下着で興奮しているのを横目に俺は、ちょびつとしかない
自分の分を食べる。あ〜うめ

つで、バカみたいに世間話で盛り上がっている二人をほつといて、
俺は防弾制服に袖を通し、自分の武器を手取る。

さあ、ここで不思議に思つた奴はいるか？そいつは正解。そのほか

は病院行きだ。

分からなかった奴のために一応答えと解説だ。

A、防弾制服に武器なんて“普通”の学校にあるわけがねえ。これ
が分からなかったら本気でやばいぞ

解説

俺たちは“武偵” と言うトチ狂ったものを育成する学校に通っている。

で、武偵とは、近年凶悪化しつつある犯罪に対応するために作られた国際資格で、武偵免許を持つものは武装が許可され逮捕権を有するなど、警察に準ずる活動ができる。ただし、武偵は警察とは違い金で動く。要するに武力を行使する探偵、便利な何でも屋なのだ。で、さらに説明すると俺が通っているのは“東京武偵校” 東京湾に浮かぶ人工の巨大な浮島メガフロートの上に作られた、学園だ。キンジも俺もこの学校にはうんざりしており、転校しようと考えている

俺たちは、白雪を先に行かせてメールをチェックしていたが、キンジが不意に時計を見ると、8：55分だった。

「あ、やべえ！ 嶺！ 58分のバスに乗り遅れた！」

「あゝマジだチャリでいくか。」

「まあそつだな」

そついつて、俺とキンジは、部屋を出る。

この後、始まる終わりのカウントダウンに俺とキンジは気づいていなかった。

そして、俺とキンジは一年どころか生涯、いや、来世まで、このバスに乗り遅れたことを後悔する事になる。

漫画やラノベぐらいしか起こることのない空から女子が降ってくるという死亡フラグが建つこととなるのだから

Women come falling from the sky. It is the introduction of the collapse determined by God. However, its decay does not allow non-standard. (空から女子が降ってくる。それは神が決めた崩壊の序章である。だが、規格外はその崩壊を許さない。)

これは、元のお話とどこかが違う物語

P r o l o g u e c a r e s ど う で も い い プ ロ ロ ー ゲ (後 書 き)

これからも頑張ろうと思います。
応援していただければ光栄です。

The story began 物語は始まった(前書き)

今回滅茶苦茶かも

The story began 物語は始まった

何でこうなった。答えは、キンジのフラグ体質のせいだな

「そのチャリ二八爆弾が仕掛けてやがります。
チャリを降りやがったり減速させやがると爆発しやがります。」

おいおいおい、どこぞのボーカロイド様が、人を脅してんじゃねえよ！

「嶺！お前この程度なら何とかなんだろうやってくれよ！」
「うるせえばかキンジ！俺でも全力でチャリこぎながらチカラなん

か使えるか馬鹿！」

俺たちは二人でいがみ合いながら、全力で、チャリをこぐ。

「9mmUZIで、並んで二台、やっべえなあどうするキンジ。」

「お前がどっちも引き付けて囷になれ」

「ふざけたこといつてんじゃねえ、ナイフ投げるぞ？」

「目の色が変わった時点で勘弁していただきたくいつてかお前やっぱ何とかできるんじゃあ・・・え？」

キンジが上を向いて素っ頓狂な声を上げる。俺もそこを見てみると、

さあ、みんな喜べ死亡フラグだ。空からおニヤの子が降ってきやがった。

「なんだあ？自殺志願者か？」

俺の期待とは裏腹に、その女の子は、パラシュートを開いてこちらに向かってくる。

「バカ！この自転車には爆弾がついてんだくるんじゃねえ」

「いいんじゃない？どうせ自殺志願者だろ？」

「違ったらどうすんだよ！」

二人でそんなやり取りをしていたらいきなり、

「そこのバカ二人！さっさと頭を下げなさい！」

そういうと、二丁拳銃で、UZIを撃つ。かなりの腕前であること

は確かだ。

「嶺！第二グラウンドに逃げるぞ！」

「了解。そこまで言ったら助けてやるよ。」

「お前やつぱり何とかなったんじゃないか！」

ん？後ろからやけに風がくるなあ？そう思って振り返ると、

「何でいんだよ！！」

キンジも送れて気がつき、

「さっきも言ったる！この自転車には――」

「バカ！」

『武偵憲章一条、仲間を信じ仲間を助けよ』行くわよ！」

多分、逆さになって助けるつもりなんだろう。キンジだけでも助けてもらおうか

「おい！ちび！俺はいいからそいつだけ助けな」

「ちびじゃない！まあいいわ分かった。」

そういうと、キンジを逆さづりのまま助けて、爆発して、体育館の方に吹っ飛んでいった。

「さて、俺も何とかしますか。」

そういうと、俺は、急にこぐのをやめる。当然、自転車は爆発すると思った奴、ここから、そんな考えしてるとおいてかれるぞ、主に俺に、

「大嘘憑き（オールフィクション）」

まあ、自転車は爆発しなかった。当たり前だろう。

今、俺は、自転車の爆発を“なかった”ことにしたのだから。

「残念だったな。」

俺の能力その？

全ての起こった現実をなかったことにする能力

大嘘憑き（オールフィクション）。」

そこまで言っと、木の陰などから20台のUZIのせたセグウェイが、出てきた。

「暴れさせてもらおうかな？」

そういつて、俺はホルスターから、愛銃のFNハイパワーと、デザートイーグル50AEを持つ。

「まずは、2台！」

銃口に向けて放たれた俺の弾丸は綺麗に吸い込まれ、2台を破壊する。

そこで、UZIが、一斉に俺めがけて撃ってくる。狙いは、頭部、腹部、両手両足。

どれも俺が“普通”なら当たっているだろう。しかし俺は、その銃弾全てを、3倍の速度で跳ね返す。
今度は10台が破壊された。

「俺の能力その？」

全てのベクトルを操作する力。

アクセラレーター
一方通行さあ、締めだ！」

俺は、武器をナイフに変えて、セグウェイに突っ込んでいく。残り8台に無謀だと思われるかもしれないが、それは違う。何せ俺は、“呪われた眼”を持っているのだから。

「お前達は殺される。他の誰にでもないこの俺に、見えてるものが違うこの俺に！」

8台全てにナイフを投げ、なぜか、全てのマシンが壊れる。

「俺の能力その？」

全てのものに線と穴が見えて、それを狙うとどんなものでも殺せる眼
直死の魔眼」

最後に、全ての残骸を眺めながら一言。

「お前達は、常識の通用しない俺に挑んだから殺されたんだ、だから、『俺は悪くない』」

そういえばキンジどうなったかな　と、俺はスキップで、体育館に歩を進めた。

おいおいおい、本日二度目の驚きだぞ。何であいつがHSSなんだ？しかもさっきのちびになんか弁解してるし、

「おいキンジ、お前ロリコンだったのか？」

「ああ嶺。いやあ、この子が強制わいせつだなんだ言ってくるから誤解を解こうと思ってね」

「その状態のお前は非常に怪しい。ぜってえそいつ中学生だろ」

「いや、多分小学生だよすごいなあと思ってね」

なぜかちびがプルプルしている。

「こんな奴ら助けるんじゃないかった。あんたたち

あたしは高2だ！！！！！！」

そういうと、打ってきた。

「待て待て待て待て！！！！キンジ何とかしろ面倒だ！」

「分かつてる！おりゃ！」

弾切れになったところをキンジが狙うが徒手格闘もやたらと上手い。

「待ちなさい！あたしは一度も逃げた犯人を見逃したことはない！」

つと、銃を撃とうとするがキンジがマガジンを盗んでいる為使えない。

「もう許さない、ないて誤っても許すもんか！」

今度は日本刀二本で切りかかってきた。

「嶺、お前の得意分野だろ！」

「任せるキンジ、刀で俺に勝てると思うなよ？ちび！」

俺も日本刀を抜いて、一本で相對する。少し隙が見えたところで、ちびの刀を上上げる。

「らあああつあああああ！！！」

「きゃわ」

武器のなくなつたちびは、その場に座り込んだ。

「逃げるぞ嶺！」

「当たり前だキンジ！」

二人で校舎に逃走する。

「次あったら風穴開けてやる

！！」

「もう二度とあいたくねえよ！」

これが俺たちと、後に『緋弾のアリア』として世界中の犯罪者を震え上がらせる鬼武偵、

神埼・H・アリアとの出会いだった。

All well-appointed stage・Let's
start with the weakest story
(全ての舞台は整った。さあ、最弱の物語を始めよう)

The story began 物語は始まった(後書き)

あゝ滅茶苦茶だな

よし、次頑張ろう！(作者はこんなにポジティブではありません)

**C
o
n
d
e
m
n
e
d

s
l
a
v
e
r
y
,

m
u
r
d
e
r

o
f

D
a
r
k
n
e
s**

作「やっべえクオリティめっちゃ落ちてる。」
嶺「早く進めようとするからだ」

Condemned
slavery,
murder
of
Dark
ne

教務課に報告を済ませた俺たちは、とりあえず教室に入っていた。
そこで待っていたのは、

「いっようキング、嶺、今年も車輜科の武藤剛氣さまと一緒にク
ラスだぜい」

「うるせえよバカ。おりゃねみんだ。寝るぞ。」

そして俺は、睡眠を開始する。

え？起こされないのかって？起こした奴は全員病院送りにしてきた
から大丈夫さ！

さて、俺は寝ていたのだが、なぜか急に外が騒がしくなってきた。
うるさくて眠れない。ちょっと会話に耳を傾けてみるか。

「理子分かつちゃった！これはフラグがばつきばきに……」

理子の馬鹿な推理が炸裂している為、キンジがらみなのだろう。また寝とくか。そこで俺が寝ようとしたそのとき！

ズツガガン

つと、発砲音がした。しかも音からしてこちらに向かってきている。それに加えて、

「風穴開けるわよ！」

つと声がする。ああ、あのちびか。犯人を特定した俺は、拳銃の弾を人差し指と中指で摘む。そして、ゆっくりと起き上がり、

「おい！！！！！！！！！！誰だ発砲しやがったのは！！！！！！死ぬとこだったろうが！！！！」

しかも俺の睡眠を邪魔しやがって、殺してやるドコノドイツダ？」

俺の直線状にはアリアの姿。こいつは完全に黒だな。俺は、アリアに向かって、愛銃を構える。アリアは、まったく空気を読まずにこ

の発言。

「あんたは！ちょうどよかった。あんたもあたしの隣に座りなさい！」

そのとき、俺の何かがブチギレタ。

「オイこらクソガキ！お前は、人を殺しかけて謝罪もなしか？お前の命日は今日だ。迅速に死亡しろ。三下アアアアアアアアアアアアア」

「落ち着け唄！今やったってなんにもないだろ？お前も強襲科なんだからそんな時の実技で相手すればいいだろ？」

「オイキンジ。邪魔するんならお前から四肢をもぎ取ってじっくり殺していくぞ？」

「すいませんでした。どうぞご自由になさってください。」

この後、先生に止められて、俺は、自分の席に戻った。アリア絶対殺す。

昼休み。俺とキンジは、アリアから逃げる為に屋上に来ていた。

「なあキンジ、お前面倒だからあいつと一緒にいろ。」

「嫌だよ俺だって」

話していると、強襲科の女子共が喋りながらやってきた。

俺たちはこっそりと物陰に隠れた。

「さっき教務科から出た周知メールさ、二年生の男子二人が自転車を爆破されたってやつ。あれ、キンジと嶺じゃない？」

「あ。あたしもそれ思った。二人とも始業式にいなかったし。」

「うわっ。今日の二人ってば不幸。チャリ爆破されて、しかもアリア？」

俺はチャリ爆破されてねえよ。

「さっきのキンジ、ちょっとカワイソーだったねー」

「しかもアリア、二人のこと探ってたみたいだよ。」

「あー。あたしも聞かれたよ。キンジと嶺ってどんな武偵なのとか、実績とか。キンジのことは『昔は強襲科ですごかったんだけどねー』って答えたし、嶺のことは『強襲科では、現最強らしいよー』て両方とも適当に答えといたけど」

「アリア、さっき教務科の前にいたよ。きっと二人の資料あさってるんだろっねー」

おいおいおいおい、俺の奴は適当じゃねえ！！

「キンジも嶺もカワイソー。女嫌いなのに、よりによってアリアだ

もんねー。アリアってさー、ヨーロッパ育ちかなんだか知らないけどさー、空気読めてないよねー」

「でもでも、アリアって男子の間じゃ人気あるみたいだよ？」

「あーそうそう。三学期に転校してきてすぐファンクラブとかできたんだって。」

「そうそう、写真部が盗撮した体育の写真とか、高値で取引されてるんだって」

「それ知ってる。フィギュアスケートとかチャアリーディングの授業とかのポラ写真なんて万単位なんだってさ。」

大丈夫なのかよここの授業にその額、頭イカレテンジャねえか？

「ってうかアリアってさ、トモダチ居ないよね。しよっちゅう休んでるし」

「お昼も一人で食べてたよ。教室の隅っこでぼっーんって」

「うわ、なんかキモ！」

俺とキンジは、同時にため息を漏らした。

どう考えても奴は普通じゃねえ！

時は移り放課後。

俺たちはダッシュで逃げ出していた。

「キンジ。あいつ面倒だから殺していいか？」

「やめてくれ。元殺人鬼でも今は武偵だろ？」

「っち！」

俺たちはキンジの部屋で、とりあえず雑談していた。すると、

ピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポンピンポン
ンピンピンポン

つと、非常に迷惑な音が聞こえてきた。

「うつるせえ！キンジさつさと出る！」

「俺かよ？！自分で出るよ！」

つと、愚痴愚痴いながらも、とりあえずドアへと歩いていく。そこで待っていたのは、

「遅い！あたしがチャイムを鳴らしたら5秒以内に出ること！」

「か、神埼！？」

神埼・H・アリアだった。俺は面倒なことが起こると思い、二人共、ドロップキックで、外に出し、ドアを閉める。

「おい嶺！何で俺まで締め出されるんだよ！」

「そうよ！さつさと中に入れなさい！」

「嫌に決まってるだろうが！どう考えても面倒だ！キンジ、入れてほしいなら入れるが、ソイツ任せるぞ？」

ところ変わって俺の部屋。

久々に帰った部屋は、きちんと清掃されていて、一週間帰ってこなかった部屋だとは思えない。

「未来か。ありがてえな」

俺の戦姉妹の赤碕未来は、こうやって、俺のいない時等に、地味に、

掃除などをしてきている。

まあ、俺は、自らのパソコンをチェックする。

そこには、たくさんの以来が入っていて、今回は、その中で一番報酬のいい依頼を選択する。

依頼内容は、

『マフィアの壊滅』

東京に現れたイタリアンマフィアを壊滅してほしいという国連からの依頼だった。その依頼書にチェックをすると、他の依頼が消えて、その説明文章にはいる。

「今回は、敵が約53人。アジトの設計は、……」

今回も楽な依頼だと判断した為、もって行く武器に、俺の最強の武器は持ってきてない。

「さて、ちょっと人でも殺してきますか。」

東京の裏路地そこには、男達の遺体が積み重なり、一人の少年を十数人で囲んでいた。

「クソガキ。てめえ俺たちの仲間を殺しやがって、」

「うるせえよおっさん。迅速に死亡しろ。」

そういつて俺は、一方通行を使って、男に近づき、直視の魔眼で見えている穴にナイフを突き刺す。

「もういい加減分かっただろう。お前ごときじゃあ、俺は倒せねえ。」

俺は、全員にいつせいにナイフを通常の10倍の速さで投げ、全員殺した。

「東京武偵高校2年、D家の末裔、大崎嶺でした。拍手！」

Weak est, in order to protect
the peaceful ones who are dabb
ling in evil (最弱は、平和なものたちを守る為に、悪
に手を染めている)

**C
o
n
d
e
m
n
e
d

s
l
a
v
e
r
y
,

m
u
r
d
e
r

o
f

D
a
r
k
n
e
s**

次こそクオリティを上げなければ

Battle of the aria vs アリア（前書き）

旅行に着てクオリィティ落ちました。

Battle of the aria vs アリア

暗殺から帰って、今俺は学校サボって部屋でごろごろしている。すると、ケータイにメールが来た。

「『件名：勝負！！』」

内容：アンタがあたしより強いか試してあげる。明日強襲科の実戦で勝負しなさい！負けたらアンタもあたしの奴隷！！』」

まあ、見るからに面倒なことなのだが、流石に、キンジのように、奴隷にはなりたくないので承諾の返事を返す。すると、今度は別の奴からメールが来た。

「『件名：赤碕です。』」

内容：明日、アリア先輩と勝負ですよ？武器の調整しておきましようか？』」

前にちよろつといったと思うが、こいつの名前は赤碕未来。俺の戦姉妹であり、武器の調整を任せられる数少ない一人だ。俺は、

「『件名：サンキュー』」

内容：ああ、ちょっと、本気でいくから調整頼む』」

つと、送ると、十数分で、未来が来た。

「嶺先輩。武器を預かりにきました。」

「ああ、これよろしく頼む。」

そういつて、俺は、自らの愛銃である、FNハイパワーと、デザートイーグル50AEを渡す。未来は、あれ？つとした顔になって、

「先輩、『闇光陰陽刀』は使わないんですか？」

「あれは、下手したら相手を殺しまうからな。安物の日本刀で十分だ。」

「そうですか……でも、それだと負ける可能性もあるんじゃない

んですか？」

「あのな、俺がそう簡単にアリアに負けるとでも思うか？」

俺が、そう聞くと、未来は、ブンブン首を振って、

「絶対ありえません！嶺先輩は世界最強です！！！」

「世界最強は無理かも知れんが、お前の整備した武器で戦うんならぜってえ勝てる。」

「任せてください！」

そういうと、未来は、自分の部屋へ大急ぎで戻っていった。

そして次の日、アリアとの勝負の日でもあるこの日、強襲科は、大いに盛り上がっていた。

「嶺〜やっちまえ〜」

「アリア〜かてええええ!!!」

まあ、嶺vsアリアの戦いが気になっているだけなのだが、

「よく逃げ出さずに来たわね」

「その自信満々な顔が絶望に変わるところを拝んでやるよ。未来！武器よこせ！」

未来が整備された俺の武器を投げる。

「さあ、始めようぜアリア。先行はお前でいい。」

「その余裕が命取りになることを教えてあげるわ！」

アリアが、お得意のガバメントで、俺を狙って来る。俺は特にあわてずに、弾を飛んでよける。そしてそのままデザートイーグルで、残りの弾を、つき返す。まあ、言う所の“銃弾返し”ってところだろうな。

アリアも、かわしながら、また、二丁拳銃でがんがん狙ってくる。俺も、FNハイパワーを抜いて、激しい銃撃戦を開始する。まあ、

装弾数は俺のほうが圧倒的に多いので、余裕で、全部落として、アリアに向かっていくが、紙一重でよけられる。

「何なのよアンタ！さっきから、全部落としては狙ってきてドンだけ命中率高いのよ！！」

「そんなこと喋ってる内にやられるぜ？」

そういつて俺は、ワイヤー付のナイフを、その辺に狙わずに、適当に投げる。するとどうだろう。アリアの周りは、ワイヤーだらけになって、うかつに動くことのできない。そこをすかさず、俺は二丁拳銃で狙撃する。アリアも負けじと、どんどん狙ってくるが、やはり、俺のほうが、装弾数が多い為、簡単にアリアのところへ飛んでいく。アリアは、日本刀をだして、ワイヤーを切りながら、こちらに向かってくる。俺は、にたりと笑って、

「剣で勝負するなんてお前もバカだな。もう俺の勝ち決定だ。」

「まだ分かんないでしょ？」

そういつて、アリアは、二刀の日本刀を巧みに使って、攻めてくる。だが、俺は、それを軽く受け流し、

「俺の本気を見せてやるよアリア。陰陽道第一の型“光影”^{こうえい}」

真正面から俺は全力でアリアにかけていく。アリアは防御の体制をとるが、それは間違いだ。俺は、そのまま反転して、アリアの後ろに回りこみ、首元に刀を置く。アリアは硬直し、周りも静まり返っている。

「俺の勝ちでいいか？アリア。」

「つく！ええ、あたしの負けよ。」

「うおおおおおつおおおおお!!!!!!!!!!

「仕事の依頼だけなら受けてやる。そんな時は俺を頼れ」

強襲科の阿呆が騒いでいるのを、横目に、俺は、自分の部屋に帰っていった。

He defeated the hero, the story
of their own progress (主人公を倒し
た彼は、自らの物語を進む)

Battle of the aria vs アリア（後書き）

光影にルビを振りました。

皆さんに質問です！（いつでも受け付けます。）

好きな曲（アニメでもドラマでも普通に、アーティストの曲でも大丈夫！！）を教えてください！！

F a i l u r e o f f r u s t r a t i o n 失敗悔しさ（前書き）

今年最後の投稿です！間に合ってよかった！

F a i l u r e o f f r u s t r a t i o n 失敗悔しさ

俺は未来に武器を調整してもらってから自分の部屋から出て行ったので、バスに乗れず、一人で、雨をベクトル操作ではじきながら歩いていた。通行人から変な目で見られるが放っておこう。歩いていると、ケータイが、俺の好きなバンドの曲を流し始めた。見るとアリアからだった。

「もしもし、何アリア」

『アンタ今どこ！！』

「今学校に向かう途中」

『ちようどいいわ。そこでC装備に武装して女子寮屋上に来なさい』

「俺はお前の奴隷ごつこの一員にはなっていないはずなんだが」

『事件よ！手伝って！』

「ん？ああ分かった。すぐ行く」

そこで電話を切る。俺は通行人から見れば、今から人を殺す殺人鬼

の顔になっていたと思う

そこから、ベクトル操作で、脚力を異常なほど高くして、女子寮屋上にまで駆ける。俺は、約3分で女子寮の屋上についた。屋上を見渡すと、アリアと俺外には階段のひさしの下に狙撃科のレキが体育座りで座ってる。

レキ スナイプ 狙撃科で入試から今までSランクの天才少女。腕は確かで、キリングレンジ 確か絶対半径は2051メートルだったっけ？俺の依頼を手伝ってもらうことがよくある。裏も含めてはただ一人だ。つで、無愛想無表情だからロボットレキなんて呼ばれてる結構デカイヘッドフォンを付けていて、風の音を聞いているらしい。俺は、コツコツとヘッドフォンをノックする。するとレキはこちらを向いて

「嶺さん、来てましたか。」

まあ、さつき無愛想無表情なんていったが俺がいると、表情豊かになる変わった奴だ。今はニコツとしている。

「ああ、さつき呼ばれてな。」

「ご苦労様です。」

「おメエもな」

二人でしゃべっていると、アリアが俺に気づいたようで

「ちょっと！嶺！なんでC装備できてないのよバカ！」

「俺はどんな装備でも怪我しねえからいいだろ」

「はあ、いざというときは守れないわよ」

「別に守ってもらおうなんざ思っちゃいねえよ」

また、レキと話しているとキングが来た。C装備で

「時間切れね」

アリアが俺らの方を向く。まあ、どうせ俺が乗るはずだったバスがあのロリ制服の金髪にジャックされただろうが

「もう一人くらいSランクがほしかったけど、出払ってるみたい」
「事件ってなんなんだよ」

キンジが不機嫌そうな顔で聞くと、

「バスジャックよ」

「やっぱりそうか、どうせ通学バスだろ？」

「そうよ。なんでわかったのよ」

「さあ？自分で調べれば？」

「お前ってすげえよな」

「武偵殺しと同じやり方みたい。とにかく行くわよ！」

俺たちは説明を受けた。レキはヘリ追跡、俺とキンジは車内、アリアは車体の調査だ。あとはインカムで話すそうだ。

「とにかく行こうぜ。あ、パラシュート俺いいから、いらない」

「はあ？いらないうってどういうことよ！？」

「言葉のまま」

「アリア、やめとけ、あいつの顔はストレス発散するときの顔だ命令でもしてストレス溜めたら死ぬぞ」

「よく分からないんだけど」

「わからないほうが安全だ」

俺は、とりあえず飛び降りて、バスの車体にぶつかる前にベクトルを操作して着地する。あれ？一辺死んで大嘘憑き使ったほうがよか

ったか？

アリアとキンジはパラシュートでバスの屋根に乗ったが、キンジは滑り落ちそうになる。で、アリアが切れる。バスの中に入ると、

「キンジ！拓哉！」

「よう、武藤。お前も運がねえな」

「なんで俺はこんなバスに乗っちまったんだ？」

「見捨てたバチがあたったんだろ」

「なんだそれ？」

「後で言う」

「嶺、キンジ、あれだ。あの子」

俺たちが武藤に言われた方向を向くと、

「大崎先輩！遠山先輩！助けてっ！」

「どした？」

「何があった？」

「け、ケータイがすり替わってて、いきなり喋り出したんです」

「ソクドラオトスト、バクハツシヤガリマス」

やっぱりこのボーカロイド、あの、金髪ロリ娘か、ツたく面倒なこと増やしやがって。

『嶺、キンジ。状況は？』

「予想通り武偵殺しの仕業だ、そっちはどうなんだ」

『爆弾を見つけたわ、カジンスキの 型プラスチック爆弾《Composition 4》、炸薬量は3500立法センチはあるわ』

キンジ「な、そんなのバスどころか電車も吹き飛ぶぞ！」

『やってみ あっ！』

「どうした！？あゝお前そっちに集中しとけ俺が何とかする」

『できるんでしょうね』

「楽勝楽勝」

UZIを載せたオープンカーがバスを追っている。

「みんな伏せろ！！！！」

「その必要はねえな。俺が何とかするから」

「はあ、分かったよ。好きにしろ」

一斉に発砲してくるが、ベクトルを操作して全部はじき返す。つで、オープンカーごと、ぶっ壊れかけたところで、直死の魔眼を発動させて、穴をめがけて、ナイフを投げると、バラバラとオープンカーごとぶっ壊れた。

「け！カスが」

「嶺先輩いい感じにぶっ壊れてますね」

「あれ？未来もこのバスに乗ってたのか？」

「ええ、とりあえず乗ってたんですがこんなことになるなんて」

「助けてやるよ。安心しな」

「はい！！」

未来と会話していて、反対方向からもう一台来るのに遅れた。

「やべえ！キンジ！！！！」

「アリア！アリアーーーー」

キンジが叫んでいるやつちまった。畜生あの時と一緒にじゃねえか！
！パンと銃声が起こる

『私は一発の銃弾、銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない。ただ、目的に向かって飛んで行くだけ私は一発の銃弾』

レキの、いつもの魔法のような自己暗示のような言葉で、ギンツ！爆弾がはじかれた。そして、川に落ちて

ドウウウウツ！！！！

爆弾が爆発し激しい水柱を上げた。

その後、武偵病院に入院したアリア俺は、今から見舞いで、守れなかったことを謝りに行くところだ

「ふふ、レキの奴もう来てたのか」

レキよりと書いたカードと、カサブランカ白百合が置いてあった。あいつもいいところあるじゃねえか

レキには謝ったらわたたと慌てられて、そんなことしなくてもいいといわれた。俺は涙が出るほど悔しい事態だったから、謝らないと気がすまなかった正義の一族の末裔だからなのかもしれない。

そして、どうやって謝ろうかと考えていたらキンジが、悲しそうな顔をしながら病室を出て行き、俺は入れ違いで入っていく

「アリア、まずはすまなかった。キンジがミスしたのも、全て俺の責任だ。」

「別にあんたが謝らなくても」

「いや、キンジは悪くない、何とかするといっておきながら何一つできなかった俺が悪い」

「そう、だけどキンジもキンジよ！期待してたのに。現場に連れてけば、またあの時みたいに実力を見せてくれると思ったのに！武偵をやめるですって？！逃げるのもいい加減にしてほしいわ！？」

「それは違うアリア」

「じゃあなんなのよ！あたしには時間がないのよ！」

「時間はないのは分かっている。だが、あいつはあいつで重いものを背負っている。それを侮辱するような発言はやめてくれ。最後にすまなかった。」

それだけ言うと、俺は病室を出て行った。病院の壁にこぶしを打ちつけながら。

Boy was the failure, advanced
to begin the next stage of
frustration in the chest. Person
is unaware (失敗をした少年は、悔しさを胸に次の舞台
へと進み始める。本人は知らないまま)

F a i l u r e o f f r u s t r a t i o n 失敗悔しさ（後書き）

皆さんc a r z o oを今年は無難すございました。
来年もよろしく願います！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6817z/>

緋弾のアリア～D家の最強の負完全

2011年12月31日20時46分発行